

## 地域との連携による子育て世代への食育

### ～ J A 横浜の「パパと一緒におやつ作り！」～

研究員 福田 いずみ

#### 目次

- |                                |                       |
|--------------------------------|-----------------------|
| 1. はじめに                        | 4. 地域の子育て支援と食育の充実に向けて |
| 2. 地域子育て支援拠点事業                 | 5. おわりに               |
| 3. 地域子育て支援拠点における J A 横浜の食農教育活動 |                       |

### 1. はじめに

父親の育児参加など、家庭における父親の役割についての関心が年々高まっている。近年の父親の子育てへの関わりについて、「第5回全国家庭動向調査」<sup>1</sup>の「夫と妻の育児分担割合」の推移を通してみていくと、圧倒的に妻の割合が大きいものの、夫の育児分担割合は調査の度に僅かながら上昇傾向にあり、父親の育児参加が進みつつあることを窺い知ることができる。

平成22年度から厚生労働省雇用均等・児童家庭局が実施している「イクメンプロジェクト」<sup>2</sup>をはじめ、自治体や企業においても男性の育児参加の社会的気運の醸成を目指し、様々な取組みが進められている。これと足並みを合わせるように、かつては、自治体等で実施している子育て支援の多くが母親に焦点を当てたものであったが、現在は父親の育児参加を促すための支援も広がりを見せている。

父親の育児参加をすすめる背景のひとつには、核家族化や地縁の希薄化により家庭での子育て力の低下や育児の孤立化による母親の育児困難がある。そしてそれは、父親が育児に積極的に関与することで軽減されることが高橋（2010）<sup>3</sup>等の研究によって明らかにされており、子育てにはパートナーである父親の育児参加が重要であることを裏付けている。

筆者は、これまで母親を対象とした J A の子育て支援に関する事例などの報告を中心に行ってきたが、本稿では父親支援に焦点を当て、 J A 横浜が地域の他の主体と連携して実施した「食育を通じた父親支援」の実践事例について報告していく。

父親支援の取組みは、母親支援に比べまだ少数であり、その中でも J A が関わった事例は希少である。本事例を通して地域における J A の子育て支援や食育への新たな関与や、

1 国立社会保障・人口問題研究所が2013年に実施した調査結果。

2 「育てる男が、家族を変える。社会が動く」をスローガンに社会全体で男性の育児関与を推進するプロジェクト。なお、「イクメン」とは、子育てを楽しみ、自分自身も成長する男性のこと。または、将来そんな人生を送ろうと考えている男性のこと。 <http://www.ikumen-project.jp/project/index.php>

3 高橋桂子、佐野綾香（2010）「父親から母親への情緒的サポートが母親の育児不安の緩和に及ぼす影響」『新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』2(2) pp.165-170.

父親支援の意義について考えていく。

なお、JA横浜の子育て支援拠点における取り組みについては、当研究所の機関誌『共済総合研究』Vol. 72<sup>4</sup>においても実践事例とアンケート調査の結果等を報告している。

## 2. 地域子育て支援拠点事業

今回報告する事例の活動場所である地域子育て支援拠点事業の目的および事業内容等は以下のとおりである。

### (1) 事業の目的と実施主体

地域子育て支援拠点事業の目的は「地域の子育て支援機能の充実を図り、子育ての不安感を緩和し、子どもの健やかな育ちを応援すること」<sup>5</sup>である(図表1)。

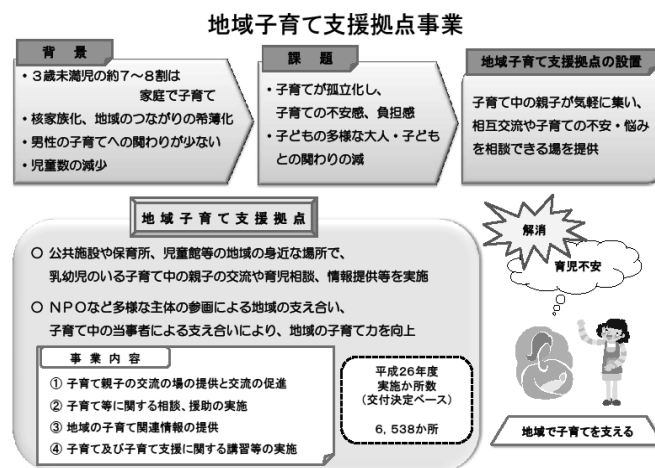
地域子育て支援拠点事業の実施主体に関しては、市町村(特別区および一部事務組合を含む)とし、市町村が定めた者への委託等も行うことができるとしている。

### (2) 事業の概要

地域子育て支援拠点事業は、乳幼児およびその保護者が相互の交流を行う場所を開設し、子育てに関する相談、情報の提供、助言その他の援助を行う事業である。事業(一般型・連携型)の概要は(図表2)のとおりである。

なお、少子化対策基本法にもとづく、子ども・子育てビジョンにおいても地域子育て支援拠点の充実とともに、食育の普及推進が位

(図表1)



(出所) 厚生労働省ホームページ

[http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/kyoten26\\_2.pdf](http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/kyoten26_2.pdf)

置づけられている。

## 3. 地域子育て支援拠点におけるJA横浜の食農教育活動

昨年度、JA横浜が管内の地域子育て支援拠点(以下、支援拠点)において、他の主体と連携して実施した父親と子どもを対象とした食育活動について報告する。

### (1) JA横浜の「子育て世代への食農教育応援事業」

JA横浜では、生活文化部の中に地域ふれあい課という地域貢献活動の専門部署を設け、食農教育をはじめ、「クッキングサロン ハマッ子」の運営やイベント等、食や農に関係

4 福田いずみ「地域子育て支援拠点における食育ーJA食農教育推進に向けた新たな視点ー」pp. 92-113.

5 厚生労働省『地域子育て支援拠点事業実施要領』平成27年5月21日。

(図表 2) 地域子育て支援事業の概要

事業名	事業内容		職員配置、開設日数、時間	実施場所	
地域子育て支援拠点事業	一般型	以下を基本事業として全て実施 ①子育て親子の交流の場の提供と交流の促進 ②子育て等に関する相談・援助の実施 ③地域の子育て関連情報の提供	一次預かり事業や放課後児童健全育成事業またはこれに準じた事業、乳幼児家庭全戸訪問事業または養育支援訪問事業、市町村独自の子育て支援事業、出張ひろば、地域支援	子育て親子の支援に関して意欲のある者であって、子育ての知識と経験を有する専任の者（2名以上） *週3日以上、1日5時間以上開設	公共施設、空き店舗、公民館、保育所等の児童福祉施設、小児科医院等の医療施設などの子育て親子が集う場所として適した場
	連携型	④子育ておよび子育て支援に関する講習等の実施（月1回以上）	地域の子育てを高める取組みの実施	子育て親子の支援に関して意欲のある者であって、子育ての知識と経験を有する専任の者（1名以上）連携施設の協力を受ける体制を整える。 *週3日以上、1日3時間以上開設	児童館、児童センターなどの子育て親子が交流し、集う場として適した場所

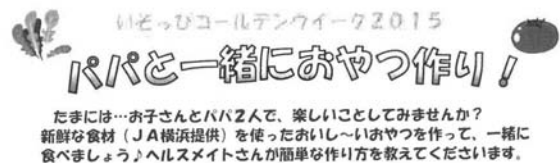
(出所)「地域子育て支援拠点事業実施要綱」平成27年5月21日一部改正 厚生労働省雇用均等・児童家庭局より筆者作成

した多彩な事業<sup>6</sup>を展開している。今回報告する事例は、事業のひとつである「子育て世代への食農教育応援事業」の一環として実施している活動である。

J A横浜の管内である神奈川県横浜市では、行政区ごとに支援拠点を設置している。各施設を運営しているのは、行政から委託を受けた社会福祉法人やNPO法人等である。J Aはこれらの支援拠点に出向き、地元農畜産物の紹介や試食などの食農教育を行っている。

(2) 地域の他の主体との連携による「パパと一緒におやつ作り！」

平成27年4月に横浜市磯子区の支援拠点において実施された「パパと一緒におやつ作り！」は、①磯子区の支援拠点、②磯子区の



**【日時】 平成27年4月25日（土）**  
**13:30～14:30**

**【会場】** 磯子区地域子育て支援拠点  
**いそびヨ 研修室**

**【対象】 2～3才の子どもとパパ**

**【定員】 先着 15組**

**【参加費】 無料**

**【申込】 4月10日（金）～電話受付**

**【持ち物】 エプロン・三角巾またはバンダナ**

メニューは「くるくる手巻きロールサンド」「ヨーグルトサラダ」  
かんたんおいしいよ！！

☆アレルギーのあるお子さんはご相談ください。

6 食農教育マイスター制度、食の検定、学校給食食材一斉供給、横浜「農」シアター（J A横浜ホームページで公開：38本）、行政・食育団体とのタイアップ事業、親子農業体験ツアー、子育て世代への食農教育応援事業、地域の食育活動応援事業、教員向け農業体験に加え「クッキングサロン ハマッ子」の運営や保育付き料理教室の開催等。

ヘルスマイト<sup>7</sup>、③JA横浜の3つの主体が連携して実施した親子料理教室である。

この料理教室は、2歳～3歳の子どもと父親を対象としており、仕事などで平日忙しい父親の参加を実現するために土曜日に開催された。

参加者は、事前に参加申し込みをした父親と子ども14組（父14名・子ども17名）合計31名。スタッフは、支援拠点（2名）、ヘルスマイト（5名）、栄養士（1名）、JA（2名）の合計10名であった。

当日は、支援拠点のスタッフが進行役となり、プログラムの前半にJA横浜の職員から食農教育用に製作した映像“横浜「農」シアター”を使った「横浜キャベツ」の説明と、料理教室で使用するためにJAから提供されたサンドウィッチ用のレタスとキュウリ（横浜産）の紹介等が行われた（写真1）。

後半は、ヘルスマイト主導のもとメニュー（ロールサンド、ヨーグルトサラダ）の紹介と調理の手順が説明された後、父親と子どもによるおやつ作りとなった。この親子料理教室は、子どもの対象年齢が2歳～3歳ということもあり、野菜を切る際は庖丁ではなく、ピーラーを使用するなどの配慮がなされていた。また、「巻く」、「混ぜる」などの作業をしながら、父と子が楽しみながら短時間で簡単に作れるような工夫が凝らされていた（写真2、3、4）。

この日、筆者が参加者に行ったヒアリングでは、次の意見を聞くことができた。

- ・平日は子どもと過ごす時間があまり持てないので貴重な体験となった。子どもが想像

（写真1）横浜野菜の説明



（写真2）ヘルスマイトによる料理の説明



（写真3）パパと一緒に調理



7 ヘルスマイト（食生活改善推進員）は、“私達の健康は私達の手で”をスローガンに、食を通じた健康づくりのボランティア。全国1,411市町村（H23.4現在）に協議会組織を持ち、地域住民に対し生涯を通じた食育の推進、健康づくりの担い手として活動している。<http://www.shokuseikatsu.or.jp/kyougikai/index.php>

(写真4) 親子で試食



していたよりも色々なことができるようになっていたことに驚いた。

- ・妻にすすめられ参加した。子どもと関わることがあまり上手ではないので不安だったが、とても楽しかった。参加してよかった。
- ・今日習った料理を家でもぜひ作ってみたい。子どものためと思い参加したが、自分もとても楽しかった。

といった意見が寄せられた。

また、昨年にも参加したというリピーターからは、「昨年参加してとてもよかったので今年も申し込んだ。家に帰ってから子どもと一緒に実習の時に使った野菜の話や、調理の過程で楽しかったことなどの話ができ。」という声を聞くことができた。

以上のヒアリング結果から、子どもの成長を感じたり、自分も楽しむことができたりと、ほとんどの父親が参加してよかったという感想を持っていた。そして、リピーターの父親の意見からは、おやつ作りの体験を通して生まれた父と子のコミュニケーション効果が確認できた。

なお、「パパと一緒におやつ作り！」は、好評につき今年度も4月下旬に実施されることが決定している。

#### 4. 地域の子育て支援と食育の充実に向けて

地域における子育て支援の中心的な役割を担っている支援拠点は、育児相談や指導、子育て親子の交流、集いの場の提供を主としながら、地域の子育て力を高める取組みを行う場所である。そして、子育て支援をより充実させていくために地域の様々な主体が連携していくことが求められている。

今回報告したJA横浜の実践事例は、支援拠点、ヘルスメイト、JAという3つの主体が連携することで、それぞれの主体の持つ専門性が発揮され、充実度の高い食育を通した父親支援となっていた。

この取組みに対する主体ごとの目的を具体的に示すと、地域子育て支援拠点においては、平日は忙しく子どもとの関わりが希薄な父親の育児参加に向けた子育て支援であり、ヘルスメイトにとっては、地域の子育て世代に向けた食育の促進である。そして、JAとしては、地域の子育て世代に向けた地産地消や食農教育とともに、農業振興やJA事業への理解の推進である。

このようにしてJAが「子育て支援」、「食生活改善」を専門とする地域の主体と連携して子育て支援や食育に参画していくことで、農業団体としての専門性や独自性をより発揮することができるといえよう。そして、地域の子育て支援や食育をより豊かにしていくだけでなく、若い世代にJAの存在意義を示すことにもつながっていくのではないかと。

#### 5. おわりに

食育というと、母親の役割が重視され、これまでの食育に関する研究においても子どもと母親の関係に注目したものが多い。そして

そこには、母親の食生活に対する積極的な意識や態度が子どもの食に対する意識の形成に影響を与えるという結果が示されている。

一方、父親については、父親が食べることに関心を持ち、家族と一緒に食卓について家族団欒の楽しい雰囲気作りに努力した場合、母親の食生活や食育に対する意識や行動が肯定的で積極的になることが富岡（1999）<sup>8</sup>によって示唆されている。このことから、育児を中心的に担う母親の育児不安を解消するためには、パートナーである父親のサポートが重要であるのと同様に、家庭内での食生活の主な担い手である母親に対する父親のサポートの重要性というものも窺い知ることができよう。

その意味において、父親に対する子育て支援や食育は、単に子育ての楽しさや子育てへの肯定的な感情を導く父親支援にとどまらず、夫婦間に子育てに対するパートナーシップが生じることで、結果的に母親のみならず、子どもへの情緒的サポートにもつながっていく重要な取組みであると考えられる。

### 【謝辞】

本稿の執筆に際し、JA横浜生活文化部部長をはじめ、地域ふれあい課の方々に多大なるご理解とご協力をいただきました。

また、支援拠点においては、スタッフの方々や参加者のお父様方にはヒアリング等に快くご対応いただきありがとうございました。

末筆ながら、この場を借りてお礼申し上げます。

### 【参考文献】

- ・伊東知之・谷出千代子（2010）「父親の育児参加への支援体制づくりに関する試論－集客型と出前型への参加者の実態から－」『仁愛大学研究紀要 人間生活学部編』第2号 pp.121-130.
- ・五十嵐久人・飯島純夫（2001）「父親の育児参加への意識と育児行動」『山梨医大紀要』第18巻 pp.89-93.
- ・大元千種（2010）「父親の育児参加とその支援について」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』5 pp.187-196.
- ・鈴木順子（2011）「父親の子育て支援に関する研究－地域子育て支援センターを利用する父親を対象として－」『金城学院大学論集 人文科学編』第8巻第1号 pp.124-133.
- ・堀田千津子（2014）「幼稚園児と父親に対する食育活動－調理体験教室における効果－」『日本食育学会誌』第8巻第1号 pp.19-27.
- ・高橋桂子、佐野綾香（2010）「父親から母親への情緒的サポートが母親の育児不安の緩和に及ぼす影響」『新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』2(2) pp.165-170.
- ・福田いずみ（2016）「地域子育て支援拠点における食育－JA食農教育の推進に向けた新たな視点－」『共済総合研究』Vol.72 pp.92-113.

8 富岡文枝（1999）「幼児への食育と両親の食意識及び食行動との関わり」『栄養学雑誌』Vol.57 pp.25-36.